

遠つ海の物語

小川国夫作 司修絵



の物語

小川国夫作
司修絵

岩波書店

遠つ海の物語

一九八九年二月二八日 第一刷発行 ©

定価一六〇〇円

(本体一五五三円)

著者 小川 国夫

発行者 緑川 亨

〒101-02 東京都千代田区一ツ橋二丁目五
発行所 株式会社 岩波書店

電話 〇三六五二二
振替 東京六三三〇

印刷・精興社 製本・松岳社

落丁本・乱丁本はお取替いたします

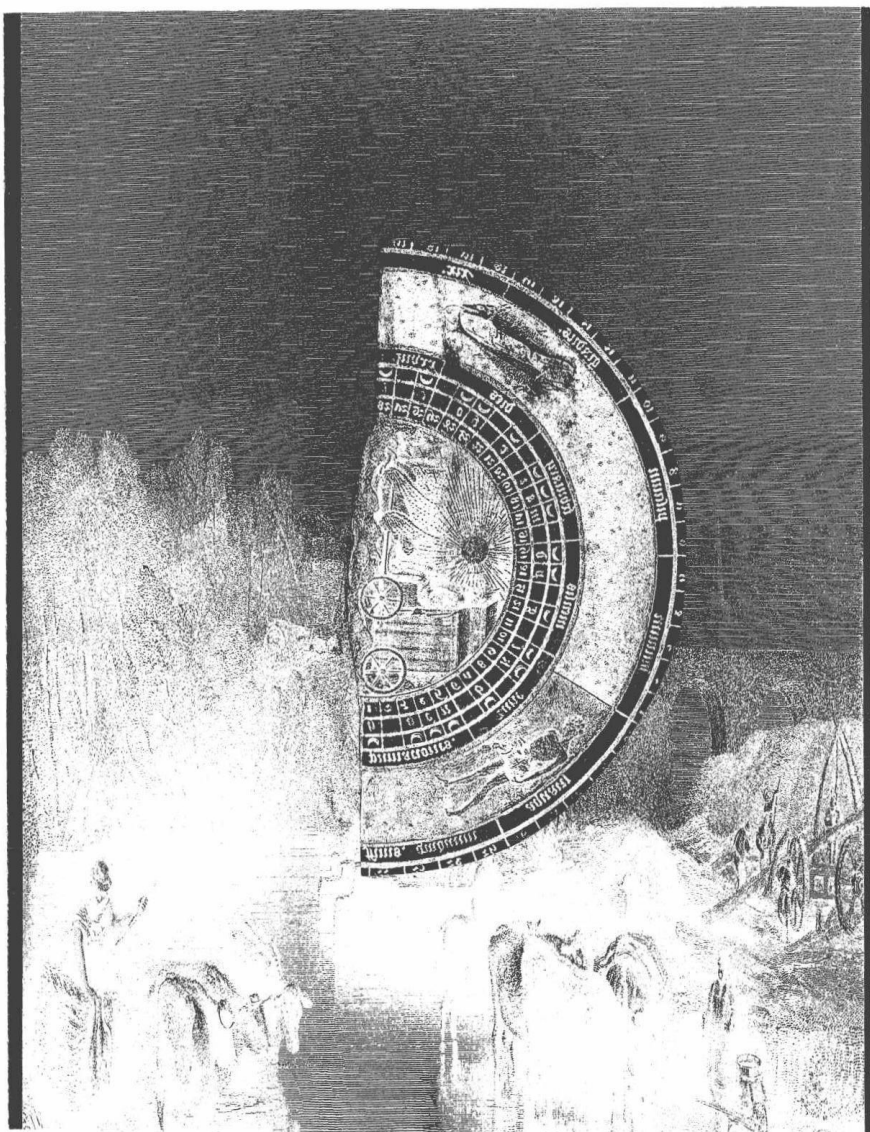
Printed in Japan
ISBN 4-00-001499-4

遠
つ
海
の
物
語

漁師の子権太はお爺さが好きでした。お爺さの声も好きでした。のどの奥にこもってごろごろしていたり、破れたふいごの音みたいにあふあわして、まとまらない声でしたが、権太はそれを聞くのが大好きだったのです。お姉^{ねえ}さやふた親は、お爺さの言うことはさっぱりわからんと言って、しつっこく聞き返したり、一体なにを言っているのか、ロレが回らんもんで、とつぶやいたりして、あげくの果てに、権太に通訳をたのむのでした。権太だけに、お爺さの声の意味がよくわかったのです。ですから、お爺さもよろこんで、権太をかわいがり、食事の時には、焼いた鰯を自分の皿から権

太の皿へ移してくれたり、自分の茶碗から麦めしを半分権太の茶碗へ分けてくれたりしました。

ところが、お爺さは息をするのが苦しいと言いはじめ、そのまま死んでしまったのです。権太は十日ばかり泣いてばかりいましたが、お墓ができますと、毎日お参りにゆき、墓石によりかかってしばらくぼんやり坐っているようになりました。その間は海や浜や松林のかなたの山を眺めていたのです。いく日かすると、権太はとんびを眺めるのが好きになりました。こうしてお爺さに寄りそってとんびを見ていたことがあったっけな、と思いながら墓石をさすってみました。するとお爺さの幽霊が現れたのです。権太は恐がるどころではありません、うれしくなって、じいちゃん、と呼びました。お爺さもうれしそうに笑って、のどをごろごろと鳴らし、ふわふわした声で、権よ、お前は鳥の中でどの鳥が一番好きか、と言いました。権太は、とんびだ、と答えました。お爺さは、なぜかいの、と聞きました。権太は言いました。烏帽子山えぼしのてっぺんの岩から吐きだされるみたいになって、雲とスレスレのそこをゆったり舞って



するとお爺さの幽霊が現れたのです (p.4)

いるだろ、あれを見ていると、おらの気持ちも空で舞っているみたいになって、お爺さが生きていた時のことがいっぱい頭へ浮かんでくるもん。

それを聞くとお爺さは、わしもの、鳥の中じゃあとんびが一番好きだ、役立たずのように言われるがの、あれでなかなか役に立つ鳥だに、とふわふわした声で言って、その幽霊は消えました。お爺さが見えなくなってしまったので、権太はしばらく泣いていましたが、涙を手の甲でふくと、とんびが役に立つ鳥だって、おかしいことを言ったなあ、とつぶやきました。

権太はそれから長い間とんびを眺めていました。とんびが好きで好きでたまらなくななり、とんびについていろいろ知りたくなりました。ちょうど、空中の二羽のとんびが、山のとっぺんの岩に吸いこまれるように姿を消したのがキッカケになって、そうだ、あの岩のところで登ってみよう、とんびの巣のすぐそばまで行ってみよう、と権太は決心しました。夢の中で決心したようなぐあいでした。

権太は烏帽子山へ登りはじめました。はなれて見渡すとすっかりした姿の山も、登

りはじめると道がわからなくて、迷いそうになります。幸いに、てっぺんの岩に生えている美しい枝ぶりの大松が時々見えたので、目じるしになり、権太はわりあい早く登りきることができました。大松の枝のこみいったところに、二羽のとんびがいました。とても大きなとんびと小さなとんびでした。鉄の錆さびよりも黒い羽がにぶく光っているのをすぐそばで見ると、権太の心臓はドキドキしました。

とても大きな一羽の声がかきこえてきました。津波がきているな。すると小さな一羽が、海の上に堤防みたいなものができて移動していたな、あれが津波か、と言いました。そうさ津波だ、へたをすると、この海岸には人っ子ひとり、犬一匹いなくなってしまうぞ、とても大きな一羽が応じました。

権太は、夢のまた夢の中にいたようなものです。なぜなら、とんびの言葉がわかったのですから……。しかし権太は、大変だ、早く家の衆に知らせなきゃあ、と真剣に思い、大急ぎで山をおりて、村へ走りこんで行きました。それにしても権太が必死になって津波警報を叫んでも、だれも信じませんでした。おっ母さの袖をつまんで、目

をつり上げて引っぱり続けていますと、薄気味悪く思ったおっ母さは、半信半疑で権太についてきました。それにつられて権太の家族と、隣組で三人避難しただけです。村はほとんど全滅しました。

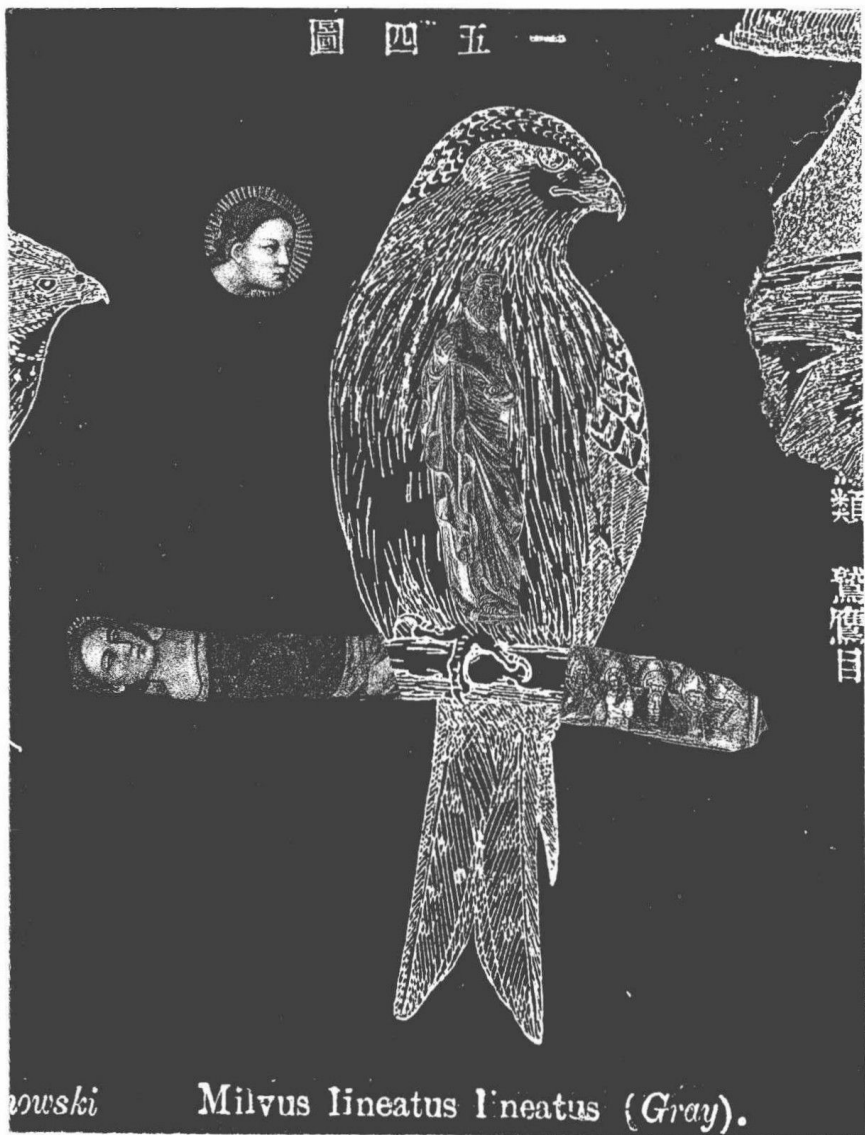
津波が引いてしまってから、荒れ果てた村を眺めながら、権太はつぶやきました。とんびの言った通りだったけな、あのとても大きなとんびも、ごろごろしたようなふわふわしたような声だったけな、だからおらにだけ意味が解ったっけのかな。

お父っさは権太に言いました。とんびの言うことがわかったんだって、本当か、それでもお前はわしの息子か。おっ母さも言いました。なんだか薄気味悪いけど、とにかく家族が生きのびることができたんだから、ありがたかったの、それにしたって、村中が死に絶えてしまった、喜んでばかりはいられない、これからどうして生きていったらいいのか、まさかとんびだって教えちゃあくれないだろうの。

村は全滅の状態でした。権太の家は四人全員が助かりましたが、他には十二人残っただけでした。どの家も働き手を失くしていました。荒れ果てた海岸で人々は途方にくれていました。もう海は鏡のように輝いていて、鷗が元気に舞っています。しかし人間はしおれきって溜息をつくばかりでした。津波の被害はとても広範囲にわたったので、近くの村からも助けにきてくれません。山の畑からまだ育っていない芋を掘ってきたり、なかば腐って乾ききった魚かすを拾ったりして、飢えをしのいでいたのです。夜になれば点々と焚火をともし、生き残りの人々は黙りこくっておりしました。海ばかりが生き生きしているのが恨めしかったのです。

地獄にいるのとおんなじだ、とお父っさは言いました。海を相手に暮しを立てるのは因果なことだと思い、すっかり力を落としていたのです。

災難の日から七日たちますと、お父っさはお姉さを連れて府中へ行きました。お姉さを奉公に出そうと思ったのです。とてもつらい務めだから覚悟するように、滅多に帰ってはこれないぞ、とお父っさから言われて、お姉さは泣きました。権太も悲しく



owski *Milvus lineatus lineatus* (Gray).

鉄の錆よりも黒い羽がにぶく光って(p.8)

なって、安心して、二人が砂山の向うに消えて行くのを見送りました。

お父っさはお姉さを府中の口入れ屋にあずけ、支度金をもらい、それで麦と豆と塩、それから鍋を買い、かついで戻ってきました。お父っさが話すには、府中にはいい仕事がある、石垣積みの下働きだそうだが、漁師よりはいい、俺も商売変えをしよう、一家で府中へ出ようじゃないか、と言うのです。

いやだ、おら漁師だ、浜へ残らあ、と権太が叫びました。お父っさはギロリと眼をむいて、生意氣言う氣か、この小僧、とんびにとっつかれたとんでもないとんまが、と怒りました。喧嘩になりそうでした。しかし、おっ母さが中に入ってくれて、わたしもこの村に生まれ、ここで生きてきた、波打ちぎわにいないと不安になってしまう、権太と一緒に浜へ残ってどうにか暮しを立てるから、お前さんは府中に出稼ぎしてお金を貯めておくれ、と言いました。お父っさはかんかんになって、こんなひどいめにあったのに、何をほざく、勝手にしろ、と言ひ、翌日府中へ行ってしまいました。

こうして権太とおっ母さ二人きりの淋しい生活が始まったのです。やがてぼつぼつ

戻ってくるにしても、その頃には、村の連中は一人残らず立ち去っていて、母と息子はすぐにも風と波にさらわれそうな様子でした。

おら漁師だ、と叫んだ権太だって、これから一体どうしたらいいものか見当はつきません。それで、お爺さのお墓へ行って、石によりかかり、じいちゃん、教えてくれや、おら立派な漁師になれるかなあ、と呟きました。権太が石に体をこすりつけていますと、石もお爺さの体のように少し柔らかになり、温かみを帯びてきました。そして、そこから首と手足が生え、お爺さの幽霊になったのです。

幽霊は言いました。痰がつかえてごろごろした、歯が抜けてふわふわした、権太以外には聞きとりにくい言い方です。それはいい考えだ、勇気があるのう、権よ、さすがわしの孫だ、お前はとびきり腕っこきの漁師になるからの、安心するんだぞ、津波なんか、なに怖いもんか、へこたれちゃあいかん、逃げちゃあいかん、戦え、そのうちに、津波をはねのける港もできるし、乗りきる舟だってできる、お前のような子供が、本気になって苦勞を乗り越えれば、漁は栄えるぞ、雲みたいにかい網が破れ